■北海道農民管弦楽団

1994年、牧野時夫代表（果樹・野菜栽培）が有機農業の研究会の仲間と設立。楽団員は約70人。年に１回、定期演奏会を開催している

２月13日、シルケボー室内管弦楽団と合同演奏。農民管弦楽団の演奏は、地元の新聞に取り上げられ高く評価された（写真撮影：神谷幸治さん）

ば農業者になれません。若者が農業を選択し、意欲を持って勉強している姿に感動しました。また、デンマークには山がなく、飲料水の95％を地下水に頼っています。そのため厳しい施肥基準が設けられていて、１ha当たり乳牛１頭と子牛１頭までという規制を守らないと補助金がもらえないそうです。ちなみに借地合わせて３９５haの農場に４５０頭の乳牛、２５００頭の豚を飼養している経営者の話では、ＥＵから１７００万円の補助金が与えられているということでした。

交流会では、「有機農業で経営していける見込みがあるか」と学生に質問したら、「自分の生き方として有機農業を選択しているので、経営を成り立たせるために有機農業を選んだわけでない」という答えに、日本の有機農業者と似た考えを持っていると思いました。校長先生の話によるとあと10年もすれば化石燃料に頼らずに農業ができるだろうとのこと。自然エネルギーの比率を高め、原子力発電を拒み、エネルギーの完全自給を達成しているデンマークは素晴らしい国だと感じましたね。

――62人の大所帯で演奏旅行をされましたが、その苦労は

牧野　以前から楽団内で、西洋音楽の故郷のヨーロッパで演奏し、地元の演奏家と交流を深めたいという話が盛り上がっていました。平成19年に楽団のメンバーになった酪農学園大学教授の金田勇さんに相談したところ、同大学の特任教授でデンマークのオーフス大学に勤める高井久光さんに話しかけてくれたのです。高井さんはさっそくシルケボー室内管弦楽団所属の木下澄代さんに話を持ちかけて、海外公演の話が一気に進みました。

一昨年の暮れには希望者が50人ほどいたのですが、昨年の春には半数以下に減り、オーケストラが成立しない状態でした。理由は、休暇がうまくとれなかったり、渡航費が１人当たり30～40万円と高額だったからです。そこでホテルのランクを下げ、自主演奏会を開いてカンパを募ったり、国際交流基金や北方圏センターから助成をいただくことで渡航費を20万円台前半にすることができ、ようやく11月下旬にメンバーが決まりました。

1月30日に江別市で国内プレ公演を行ったのですが、直前に私が帯状疱疹（ほうしん）を発症。夜通し除雪のアルバイトをしながら公演の準備をしていたので、体が悲鳴を上げたんでしょうね。そんなことを重ねながらデンマーク公演を実現させました。

――今後の活動は

牧野　毎年10月下旬から農民管弦楽団の合同練習が始まり、翌年の１月下旬もしくは２月上旬に定期演奏会を行っています。来年の１月29日に中標津町で定期演奏会を開催しますので、ぜひ来てください。中標津町は合唱が盛んな町で、地元農業者による農民合唱団とジョイントコンサートを開く計画を立てています。

「農民こそ真の芸術家になりうる」と説いた宮沢賢治は、農民オーケストラの結成を夢見ていましたが、その試みは失敗し、若くして病で亡くなりました。賢治が没して80年近くになりますが、賢治の故郷・岩手県花巻市で北海道農民管弦楽団による演奏会を開きたいと団員たちと話し合っているんですよ。

〈文責／編集部〉

カロー有機農業学校を視察。デンマークの農業を取り巻く環境について話を伺った

総勢62人でデンマークの公演旅行を行った北海道農民管弦楽団のメンバー